#01_あなたのカノジョ？

★…寧音
◆…望海

★「お、お邪魔しまーす」
★「あぁ…あっ！　起きてる！　本当に目を覚ましたんだ！」
★「良かった…良かった良かった、良かったよぉ！
　事故にあったって聞いた時は、寧音…本当にどうしようって…！
　でも、良かった…本当に…良かったぁ！」
★「あ…ごめんね。急にこんなこと言われてもびっくりしちゃうよね…
　今のあなたからしたら寧音は初めて会う人…なんだもんね」
★「聞いたよ。事故のせいで記憶が無くなっちゃったって…」
★「でも、大丈夫！　寧音がついてるから！
　あなたがどういう状態だったとしても、
　寧音との絆は絶対に切れないんだから！」
★「だって、寧音はあなたの彼女さんだもん」
★「世界で１番あなたのことが好きな…
　ううん、だいだいだーい好きな彼女さん…」
★「これからはあなたの身の回りのお世話は、
　寧音がぜーんぶやってあげるから安心してね♪」
★「じゃあ…まずはぁ…」

★「…ん？」
★「誰？　今いいところだったのにぃ…」
★「はーい」

◆「失礼します」

★「え…誰？　あんた」

◆「ふぅっ…！」

★「えぇっ!?　ちょっとちょっと！」

◆「あなたが生きていてくれて…本当に良かった。
　事故にあったと聞いた時は、どうしようかと…」
★「ちょ、ちょっと！　あんたなんなのよ！　無視しないでよ！
　もしもーし！　聞こえてますかー？」

◆「お医者様から事情は聞いています。でも安心してください。
　記憶がなくなろうと、あなたは私の恋人であることに変わりはありません。
　何があっても支えます」
★「なんで無視すんの？　ていうか近くない？　ねぇ、近いよね？
　一体誰の許可を取ってこんなことしてるわけ？
　ていうか本当にあんたはなんなのよ！」

★「意味わかんないんだけど！　人の恋人にベタベタ触んないでくれる!?」

◆「恋人…？　そちらこそ意味のわからないことを言わないでください。
　この方は私の恋人なんですが？」

★「はっ？　はぁー？　そんなわけないし！　嘘つくのやめなさいよね！」

◆「あなたこそ…記憶喪失につけこんで、
　下手な嘘をつくのは見苦しいですよ？」
◆「ねえ？　あなたもそう思いますよね？」
◆「いえ、記憶がなくなったあなたに聞くのも酷でしたね…」
◆「でも、私こそが本当のあなたの彼女です。それだけは信じてくださいね？」

★「記憶喪失につけこんでるのはそっちじゃん！
　恋人だっていうのなら、証拠を見せなさいよ！　証拠を！」

◆「…証拠ですか？」
◆「それは…ちょっと…」

★「いや、めちゃくちゃ怪しいし！
　ダメだよ、こんなのの言うこと信じちゃ！」

◆「あります！　ちょっと待ってください！」
◆「…これです」

★「何それ？　キーホルダー？」

◆「そうです…大切な絆の証です」

★「えー…それってなんとでも言えない？」

◆「彼の枕元にも置いてあるでしょう？　同じものが」

★「うぇっ…!?　本当だぁ･･･で、でも･･･」

◆「これで理解していただけましたか？」
◆「あなたも…わかってくれますよね？　本当のあなたの恋人は、私です」

★「はぁ～？　何それ！　全然違うし！」

◆「では、あなたはあるんですか？　この方と恋人であるという証拠が」

★「あるし！　見せるし！」
★「これよっ！」

◆「これって…！」

★「写真よ写真！　見て分かるでしょう」

◆「こんなに寄り添って…一体どういう！」

★「ね、これでわかったでしょ？　恋人は寧音の方だって！」

◆「確かに本物のようですが…うぅ…これでは平行線じゃないですか」

★「というか、あんまり考えたくはないけど…
　彼女が 2 人いたとかそういう可能性もあったのかな？」

◆「そんなの…ありえません！」
◆「…ですよね？」

★「無駄だよ～。聞いたって覚えてないんだから」

◆「でも、私は…信じています」

★「寧音だって、信じてるし…うぅん…」
★「じゃあさ。こうしない？　どっちが本物の彼女さんか、
　これからの寧音達の行動を見て判断してもらうの」

◆「…どういうことですか？」

★「だって、どっちも証拠を出しているでしょ？
　そしてどっちも彼女だって言い張ってる」
★「なら、これからの頑張りで判断してもらうしかなくない？」
★「本当の彼女は寧音だけど、あんたがそこまで言うなら。
　正々堂々戦おうって言ってんの！」

◆「何を言うんですか。本物の彼女は私です。
　こんなこと、試すこと自体が無意味です」

★「ふ～ん、自信、ないんだ」

◆「…なっ！　そんなことありませんが!?」

★「じゃあ決定ね！　ルールは入院中に２人でお世話をして、
　改めて好きになった方が本物の恋人になる。こんなんでどう？」

◆「…まぁ、いいでしょう。できればお世話は１人でやりたかったのですが…」
◆「…あなたも、それでいいですよね？」

★「はい、決定！　じゃあ、これからよろしくね！」